

2017年5月7日

福音書からのメッセージ

わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。

(ヨハネによる福音書10章9節)

わたしたちとイエス様とは、一体どんな関係なのでしょう。わたしが子どものころ、神さまに対して持っていたイメージは、「とても怖い存在」というものでした。いつも神さまに見張られているという感覚があったのです。この感覚は、旧約聖書の中にも見られます。

そのころ、人々は神さまから与えられた掟を守ることに必死になっていました。しかし、すべてのことをきちんと守れるのであればいいのですが、実際に出来ないことのほうが多いのです。例えば殺すなという命令があります。確かに肉体的に人の命を奪ったことはないかもしれませんが、でもイエス様は言います。人に向かって馬鹿と言うことだって、駄目なのだ。その基準に立つと、わたしたちのうち、だれが神さまの前に正しいものとして立てるのでしょうか。

イエス様は、そんな神さまの言いつけを守りたくても守れない人たち、神さまの前に立つことが出来ず、周りの人たちからも虐げられ、差別されていた人たちの元に来られました。そして言われるのです。自分は羊飼いであり、また羊の門であると。イエス様とわたしたちは、そのような関係なのだと言われます。

羊とはとても弱い動物です。目がとても悪く、群れから外れたら自分の力で戻ることができません。だから羊は、お互いにぴったりくっついて行動します。食べ物のある草むらにも、自分たちの力だけではなかなかたどり着くことができない。また転んでひっくりかえったら、起き上がることすらできない、それが羊なのです。



その弱い羊たちを守り、導くのが羊飼いです。一匹一匹を名前呼び、飲み食いできる場所に連れて行き、敵が来たら命がけで守り、寝ることも惜しんで世話をします。そして羊たちは、自分の羊飼いの声を聞き、安心

して牧場へと導かれます。それが羊と羊飼いの関係です。その関係の中に、イエス様とわたしたちがいるのです。神さまは、わたしたちを見張るためにイエス様を遣わされたわけではありません。わたしたちを生かすために、弱くて倒れやすいわたしたちを正しい場所に導くために、イエス様を羊飼いとして遣わされたのです。

さらにイエス様は、羊の門でもあります。門というと、入口です。わたしたちは、神さまの元に、神の国に入りたいと願います。でもその入口に、自分の力でたどり着くことができないのです。イエス様がいくら羊飼いとして来られ、こっちだよって導こうとしても、倒れるときがある。動けないことだって、いくらでもあるのです。

だから門であるイエス様は、自ら来てくれるのです。歩くことができなくなっても、わたしたちの方にやってきて名前を呼び、その手を握って門の中へ導いてくださる。そのためにイエス様は、わたしたちの元に来てくださったのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>